ＣＤコンサート2008. 1. 12

１　フランツ・シューベルト / ４つの即興曲 Op90 D.899
ピアノ：ラドゥ・ルプー　　1982録音DECCA盤

1827年頃の作品。作曲者のあまりに早い晩年の作で、構成的な追求よりも自由な旋律美を優先させている。同時期の同名の作品（Op.142, D935）が一つのソナタに見たてられるのと異なり、同じ「4つの」作品でもそれぞれが自由に彩りある個性を見せている。おおむね三部形式であるが調性が不安定で、原調に解決ないまま終わっている作品が多い。

・第1曲　Allegro moderato ハ短調。冒頭に現れる主題による自由な変奏曲である。序奏はG音のオクターヴ。右手の単旋律のみの主題が寂しげな効果を出している。すぐに変イ長調に移り、変イ短調を交えながら三連符に乗って雄大な歌がはじまる。転調が多くハ短調を確認できるのは調号のみである。コーダは同主調ハ長調。最弱音で静かに終わる。
・第2曲　Allegro　変ホ長調。ロンド形式。チェルニーの練習曲に似た三連符の無窮動。音階が中心なのでピアニスティックな技巧を見せつけている。ロ短調・変ホ短調の挿入部は効果的で、コーダも変ホ短調で終わっている。
・第3曲　Andante 変ト長調。無言歌風の落ち着いた和声に、中声部の三連符アルペジョが装飾を施す構造。2分の2拍子を表す記号が2つ並べられているので、作者本人による「2分の4拍子」の指定とされている。
・第4曲　Allegretto 変イ短調。本曲集ではもっとも有名。変イ短調のアルペジョが徐々に変イ長調に変化していく。演奏も比較的容易で親しまれている。左手のバリトンが美しい。中間部はエンハーモニックな下属調の嬰ハ短調で、暗い情熱が迸る。

２　ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン / エグモント Op84　序曲
指揮：アンタル・ドラティ　ロンドン交響楽団　1962録音mercury盤

ゲーテの1787年の同名の戯曲のための劇付随音楽。現在では序曲のみが単独で演奏されるが、他にソプラノ独唱を伴う曲を含む9曲が作曲された。

３　ピョートル・チャイコフスキー / 序曲「1812年」Op49
指揮：アンタル・ドラティ　ロンドン交響楽団　1958録音mercury盤

1-76小節：Largo　ヴィオラとチェロのソロが奏でるロシア正教会の聖歌を主題とする序奏に始まり、以後木管群と弦楽器群が交互に演奏する（後述のように、この部分を合唱に置き換える演奏もある）。和音の強奏で序奏を終えるとオーボエ、ついでチェロとコントラバスに第1主題がゆだねられる。Andanteの部分が近づくにつれてメロディーも次第に激しくなるが、解説書ではロシア民衆の嘆きや怒りに準えるところもある。
77-95小節：Andante　ロシア軍の行進と準えられるこの部分は、ティンパニの弱いトレモロに始まり、低音部楽器や小太鼓が主題を引き継ぎ、次第に盛り上がりを見せる。
96-357小節：Allegro giusto　ボロディノ地方の民謡を題材に書かれたものと言われている部分があるため、この部分は「ボロディノの戦い」と説明がつくこともある。フランス国歌「ラ・マルセイエーズ」の旋律をホルンが演奏するのをきっかけに、金管楽器群で反復して演奏される。やがて、木管群と弦楽器群がメインの主題の部分に入り、やがてラ・マルセイエーズの主題と咆哮する。激しい咆哮が終わると、一転して緩やかな主題に引き継がれる。227小節からは再びラ・マルセイエーズの主題が響くが、前半部分とはうって変わり各パートを転々としながら演奏される。そのため、「「パルチザンに追い散らされるナポレオン軍」を表現している」と書かれる場合もある。ラ・マルセイエーズの主題は次第に貧弱になり、326小節から332小節にかけてコルネットとトロンボーンで伸びに伸びきって演奏され、それを凌駕するように管楽器群・弦楽器群・打楽器群が咆哮する。最初の大砲もこの部分で5回「発射」される。山場を越えると各楽器群とも駆け下りるような音形となる。
358-379小節：Largo　冒頭の主題と同一の旋律であるが、冒頭とはうって変わって勝利を表現している。
380-422小節：Allegro vivace　全楽器強奏で始まり、ロシア帝国国歌がバスーン、ホルン、コルネット、低音弦楽器で演奏され、鐘が響き大砲もとどろく。なお、ソ連時代にはロシア帝国国歌が演奏禁止され、それに伴いロシア帝国国歌の部分がミハイル・グリンカ作曲の歌劇「イワン・スサーニン」（皇帝に捧げし命）の終曲に書き換えられた版も存在する。これについては編曲者の名前を取って「シェバーリン版」とも言われる。

4　タレガ / アルハンブラの思い出
5　作者不詳 / 禁じられた遊び
ギター：ナルシソ・イエペス　　ＤＧ盤

6　ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン /
ロマンス第２番ヘ長調 Op50
ヴァイオリン：ヘンリック・シェリング
指揮：ベルナルト・ハイティンク
アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団　　PHILIPS盤

1798年に作曲したヴァイオリンと管弦楽のための楽曲。ロマンス第1番ト長調 Op.40より先に作られたが、作品番号は後である。ト長調のものとは管弦楽の規模が小さい点において同じであるが、ト長調のものが和音進行を基調にしているのに対し、これは旋律的である。abaca-コーダの小ロンド形式で書かれ、その旋律の美しさにおいてよく取り上げられる。

7　ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン /
ヴァイオリン・ソナタ第５番ヘ長調 Op24 「春」
ヴァイオリン：ローラ・ボベスコ
ピアノ：ジャック・ジャンティ　　1981録音PHILIPS盤

1801年に書かれた。その、幸福感に満ちた明るい曲想から春という愛称で親しまれている。
元々、ベートーヴェンは前作のイ短調Op.23とセットで出版するつもりであったが、製本上の理由により、別々に出版された。
・第1楽章 Allegro
ヘ長調、ソナタ形式。ピアノの伴奏に乗ってヴァイオリンで第1主題が歌われる。主題は10小節からなり、順次進行で下降したあと、跳躍を含む音型が3回繰り返されて盛り上がって終わるという、大変バランスの取れた、非常に美しい旋律である。その旋律がピアノで繰り返されたあと、推移となり第2主題が導かれるが、それは第1主題と対比して、和音連打によるものである。コデッタは連打による動機の模倣と、音階によるものからなる。展開部は第2主題が使用され、再現部は提示部と逆で、第1主題はピアノ→ヴァイオリンの順で奏される。
・第2楽章 Adagio molto espressivo
変ロ長調、三部形式。分散和音の伴奏に乗って、美しい旋律がピアノ、ヴァイオリンの順で歌われる。推移部のあと、主題が再現する際、それは装飾的な変奏や、転調などで彩られる。
・第3楽章 Scherzo,Allegro molto
ヘ長調、スケルツォ。音階が上がったり下がったりする主部と急速なトリオからなる、短い楽章。
・第4楽章 Rondo,Allegro ma non troppo
ヘ長調、ロンド形式。A-B-A-C-A-B-A-コーダの構造を持つ。軽やかなAの主題は、同音が3回連打されることで印象付けられる。2部分からなり、ハ短調に陰るなど様々な要素を持つBと、3連符とシンコペーションのリズムを伴うニ短調のCを経て、Aの主題がニ長調で再現されると、さらに美しく変奏されて、喜びに満ちたまま曲は終わる。

各出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia)』より